

[朝鮮の美術展によせて]

李朝の灞橋尋梅図

李朝時代には〈灞橋尋梅〉が画題として大層好まれたらしく、その作品が現在も比較的多く遺されています。灞橋尋梅とは中国の唐代の詩人孟浩然(689~740)に纏わる逸話で、浩然是梅が大変好きのため、梅が咲く頃になると寒風も厭わず驢馬に乗り、灞橋を渡って山中に梅花を探し回ったそうです。言うまでもありませんが、浩然是私達日本人にも馴染み深い漢詩「春暁詩」(春眠不觉晓、处处闻啼鳥、夜来风雨声、花落知多少)の作者です。中国は湖北・襄陽の人で、鹿門山中に隠棲し、情を詩に託して自適し、その詩は自然を宗とし、気品に富み、王維と並び称されたと伝えられています。

図に見られるのは出立も凜凜しい浩然が驢馬に跨り、従者を連れて橋を渡りかけているところですが、この橋が古来有名な灞橋です。灞橋は唐代の都であった長安(現在の陝西省西安市)の東を流れる灞水に架した橋で、昔長安の人は長安から東に行く旅人を見送る時、皆この橋まで来て、橋畔の柳を手折って別れたそうです。また灞橋は橋上からの眺めが大層良いので、士人がこの橋を驢馬に乗って渡ると詩興が浮かぶと言われ、〈灞橋驢上〉、あるいは〈灞橋之詩意〉という語句も生まれました。浩然是きつと風雪の灞橋驢上で眉を聳やか

して朗朗と詩を吟じたに違いありません。

李朝時代は儒教の教典である四書五経が教養の基盤で、絵画もそれらに典拠をもつ中国の故事に画題を多く求めましたので、灞橋尋梅は文人趣味にあって大いに描かれたものと思われます。作品としては申潜(1491~1554)の筆と伝えられる長さ2メートル余の巻物、それに沈師正(1707~1769)が1776年に描いた堅長の掛幅(共に韓国・国立中央博物館蔵)などが有名です。

カットの2図はいずれも当館所蔵で、右図は筆者が未詳ですが、作風から16世紀前半の制作と推定されるものです。図は一見すると浙派風に思われますが、荒削りの山や岩の皴法や樹法は明らかに李朝のそれです。また、画技や構図に稚拙さを残しながら屈託のない強い輪郭線で平板に書き連ねていくところなどはまさしく李朝画の特徴です。左図は『藝苑合珍』と題された書画冊に収められているものですが、画は

画員の梁箕星、書は名筆家の尹淳(1680~1741)の手になるものです。

ところで、筆者は一昨年の1月に中国を訪ね、その折灞橋を渡る機会を得ました。残念ながら驢馬の背上でゆると参る訳にはいかず、20数名の団体が乗るバスで、しかも行き交う人や車の中を慌しく通り過ぎただけでしたから、河畔に立って柳枝を折ったり、詩情を感じたりする余裕はありませんでした。灞水は関中八川の一つと

云われる大河だけに、その広々とした雪の河原は遙か彼方まで見通しが開けており、画にみられるような山の追まった溪流状の景観とは全く異なっていました。車窓からカメラで覗いた灞水の雪景色は構図に纏まりが無く、少々戸惑いながらシャッターを数回続けて押しましたが、その内の一枚は灞水の遠くの鉄橋を、白い煙を吐いて進む蒸気汽関車を臍げに把えていました。(吉田宏志)

灞橋尋梅図



灞橋尋梅図(「藝苑合珍」より)

